奄美・沖縄世界自然遺産地域交流事業
研修報告

はじめに、奄美・沖縄世界自然遺産地域交流事業に携わってくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。
奄美大島での1日研修、そして沖縄での3泊4日の研修は、私にとって「自分の住む島・奄美大島を改めて見つめ直す」貴重な機会となりました。

この事業に応募する際、私は昨年、鹿児島県本土の高校生と交流したときの自己紹介文をもとに志望理由書を書きました。

『なだらかな地形の北部、それに対し山林が多くを占め険しい地形の中南部、私の住んでいる奄美大島は亜熱帯に属し、生物多様性豊かで固有種も多く生息し、私も生きた化石と言われるアマミノクロウサギを間近で見たことが何度かあります。都会のように大型商業施設はありませんが自宅から少し車を走らせると満天の星空や天の川を眺める事が出来るそんな自然豊かな奄美大島から来ました。』

この自己紹介に対して、「住んでいる場所が世界自然遺産ってすごい！」「羨ましい！」「行ってみたい！」という声を多くもらいました。
しかしその一方で、地元に暮らしていながら奄美について深く知らない自分に気づきました。もっと理解を深めたいという思いから、このプログラムへの参加を決意しました。

奄美研修では、ガイドの方の案内で金作原を歩き、動植物の観察を行いました。その後、奄美野生生物保護センターで環境省職員の方から、ロードキルやノネコ問題、オーバーツーリズムなど、奄美が抱える環境課題についてのお話を伺い、グループごとの話し合いを通して、身近なところにも多くの課題が潜んでいることを実感し、解決策について意見を出し合いました。

沖縄研修では、同じく世界自然遺産に登録された「やんばる地域」を中心に、ナイトハイクでの自然観察や、ヤンバルクイナの生態を実際に見ることができる施設の見学、地元高校と

の交流など今までの生活では出来ないような様々なことを経験させていただきました。

特に印象に残っているのは、辺土名高校でのフィールドワークです。辺土名高校には、奄美にはない「自然環境科」があり、「沖縄の自然」や「環境調査法」などを学んでいます。生徒の多くがサイエンス部に所属しており、校舎に入ると沖縄の河川を模した水槽や屋外にはヤギの飼育スペース、琉球イヌも間近に見ることができました。さらに、動物の餌となるゴキブリの飼育や、苔の栽培も生徒たちが自ら行っており、実際にベッコウクモバチを捕まえる様子も見られ、学校全体がまるで小さな博物館のようでした。同年代の高校生が自然保護に主体的に取り組む姿に、強い刺激を受けました。

アオカナヘビ

今回の研修を通して、同世代の高校生と奄美・沖縄それぞれの自然環境の課題について語り合い、考えを共有できたことは大きな学びでした。そして、自然を守ることの責任と重みを改めて感じました。
奄美は観光客の増加に伴う自然環境への影響、希少な野生動植物を狙った密猟や盗掘など様々な解決すべき問題を抱えています。自然と人の距離が近い奄美。今ある自然を「当たり前の存在」とせず、島の豊かな生態系を守りながら、自然と共存する道を考えていくことが大切だと私は思います。

島の自然を守るために、次の世代を担う私たちが、世界自然遺産の価値を次世代へ継承すべく、一人ひとりが当事者意識を持ち考える必要がある、そう強く感じた研修でした。

改めて様々な自然環境に触れ、実地で学ぶことの大切さを知るよい機会となりました。引率してくださった職員の皆さん、メンバーの皆さんありがとうございました！！